

自分でできる介護を手助けする

11月11日の「介護の日」を記念して行われた本紙の特別座談会。出席者は行政・ケアマネジャーの代表として、厚生労働省老健局振興課介護支援専門官の石山麗子さん、利用者・家族の代表として、元朝日新聞論説委員で国際医療福祉大学大学院教授の大熊由紀子さん、介護事業者・従事者の代表として、東京都で介護事業を展開する飯塚裕久さん。

介護保険は立ち止まって考える時期にきている



石山麗子さん
(いしやま・れいこ)
国際医療福祉大学大学院保健医療学部博士課程修了。博士(医療福祉学)。東京海上日動ベターライフサービス、シニアケアマネジャーの育成を担当。2015年、日本介護支援専門員協会常任理事に就任。16年、厚生労働省老健局振興課介護支援専門官就任

「みんなが地域で一緒に考えて、制度や社会を創っていくことが大事」

「介護保険の評価」
石山 本日の司会を務めて下さる石山麗子さん。私は幸を卒業して、障子の入施設に勤務しました。その後、2000年4月から介護保険が始まり、ケアマネジャーの仕事に就きました。現在は厚生労働省老健局振興課で介護支援専門官を務めています。仕事として介護に携わってきた一方で、父親の介護も経験し、現在は認知症の母がいます。本日は介護を推進する側と受ける側双方の立場で発言していただきます。

より良い介護を行うために

座談会

<出席者>
行政・ケアマネジャー代表
石山麗子さん
厚生労働省老健局振興課 介護支援専門官

<利用者・家族代表>
大熊由紀子さん
国際医療福祉大学大学院 教授

<事業者・従事者代表>
飯塚裕久さん
株式会社ケアワーク弥生 取締役

大熊 大熊由紀子申します。朝日新聞の論説委員だった1989年、高齢化の先進国での暮らしを学ぶために、石山麗子さんとともに日本を訪ねました。その後、2000年4月から介護保険が始まり、ケアマネジャーの仕事に就きました。現在は厚生労働省老健局振興課で介護支援専門官を務めています。仕事として介護に携わってきた一方で、父親の介護も経験し、現在は認知症の母がいます。本日は介護を推進する側と受ける側双方の立場で発言していただきます。



飯塚裕久さん
(いづか・ひろひさ)
ケアワーク弥生取締役。小規模多機能型居宅介護「ユアハウス弥生」所長。介護現場の悩みや課題を共有し解決を目指すための活動を行うNPO法人もんじゅを2010年に立ち上げ、代表理事を務めている。介護を題材にした漫画「ヘルプマン！」(くさか里樹)の介護起業編主役のモデル

「例え認知症になっても、適切に自分の人生を選べる環境を整えていく」

大熊 有料老人ホームの転落死事件が、人命や尊厳の被害を及ぼす。介護現場では、認知症の発生が急増している。介護現場には、介護職員の賃金が低く抑えられている現実があり、この事に向かい、介護職員の賃金を引き上げ、適切な環境を整えることが、政治が本気で向き合わなければならない。

石山 介護現場は、介護職員の賃金が低く抑えられている現実があり、この事に向かい、介護職員の賃金を引き上げ、適切な環境を整えることが、政治が本気で向き合わなければならない。

「誇り・味方・居場所」が大事



大熊由紀子さん
(おおくま・ゆきこ)
東京大学教養学部卒業後、朝日新聞入社。女性初の論説委員となり、医療・福祉・科学分野の社説を担当。2004年より国際医療福祉大学大学院教授を経て、2004年より「寝たきり老人」のいる国「介護保険」『誇り・味方・居場所』私の社会保障論』などのロングセラーを持つ。



大熊さんの母の介護の様子。心から感謝し、言葉を覚えた「テキベン」

理想の介護

石山 最先端のテクノロジーやロボット、人工知能が介護の分野にも導入されていく中で、新しい介護の形が生まれていく中で、政治が本気で向き合わなければならない。



どうすれば介護の現状をより良くできるのか。示唆に富む議論が行われた



介護は利用者への「尊重」と「敬意」が大事

大熊 介護の世界は、人手不足が深刻な問題になっています。特に介護現場の人手不足は、介護職員の賃金が低く抑えられている現実があり、この事に向かい、介護職員の賃金を引き上げ、適切な環境を整えることが、政治が本気で向き合わなければならない。

石山 介護現場は、介護職員の賃金が低く抑えられている現実があり、この事に向かい、介護職員の賃金を引き上げ、適切な環境を整えることが、政治が本気で向き合わなければならない。

石山 介護現場は、介護職員の賃金が低く抑えられている現実があり、この事に向かい、介護職員の賃金を引き上げ、適切な環境を整えることが、政治が本気で向き合わなければならない。